

# 私は懷疑派だ

——映画文学人生論

二葉亭四迷 (1864-1909)

『私は懷疑派だ』(1908) 「文章世界」  
『浮雲』(1887-89) 「金港堂」 「都の花」  
『小説総論』(1886) [中央學術雑誌]  
『平凡』(1907) 「東京朝日新聞」

私は到底文学者じゃない。私は、まア、懷疑派だ。

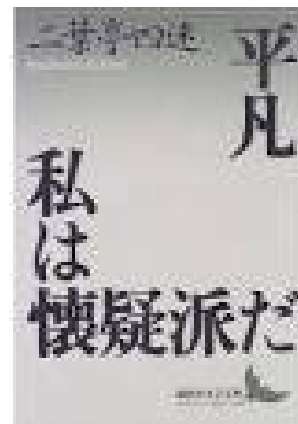
「文学は男子一生の仕事に非ず」と二葉亭四迷は言ったという。いつ、どこで、言ったのかは確認していないが、『私は懷疑派だ』や『平凡』を読むと、そんな意味のニュアンスが感じとれる。

小説『平凡』の主人公は、「もう小説も何だか馬鹿らしくて些(ちつ)とも書けない。泰西の名家の作品を読んで見ても、矢張(やはり)馬鹿らしい。此様(このよう)な心持で碌な物が出来る筈もないから、評判も段々落ちる。生活も困難になって来る。もう私もシュン外れだ。此処らが思切り時だろう」と判断し、文壇を去って、役所に勤めるようになった。

また、『私は懷疑派だ』では、「私は到底文学者じゃない。私は、まア、懷疑派だ」「『平凡』や『其面影』を書いていてまことにくだらない」と述べている。

文学に理解のなかった父に、「くたばってしめ(ま)え」といわれたのにもめげず、『浮雲』を発表し、言文一致体による日本初の近代小説という評価をかちとった作家にしては消極的な姿勢だと思わざるをえない。

しかし、明治維新以後の近代文学とは実はその程度のものかもしれない。江戸時代には文学とは経世済民を心がける儒学という学問あるいは儒学者という意味だった。それに対し、『小説神髓』



# 私は懷疑派だ

映画文学人生論

で坪内逍遙が主張した百人煩惱の人情や世態風俗を巧みに模写した小説を読んでも、経世済民どころか、実生活において衣食住のたしになるとも思えず、くだらないといえ、くだらない。

もつとも、二葉亭四迷の場合、『浮雲』や『平凡』の原稿料が少ないとはいえ、ある程度は衣食住の役に立っている。文名があがれば、原稿の注文が舞い込んで、収入も増える。「シユン外れ」で、注文がこなくなれば収入が減る。つまり、文学にも需要と供給の市場原理が働いている——それだけのこともかもしれない。

『浮雲』は当初、坪内雄藏（逍遙）の名前で発表され、印税の半分は逍遙が受け取った。無名の二葉亭四迷よりも有名な『小説神髓』の著者坪内逍遙の名前にしたほうが売れるという判断からだが、これも市場原理である。

その結果、二葉亭四迷は日本初の近代小説の作者としての名声を得たが、その名声や実績も『私は懷疑派だ』によれば、あやしく、うさんくさいものだ。そんな認識をもてば、「文学は男子一生の仕事にあらず」というのも理解できる。

懷疑の対象は、二葉亭四迷にかぎらない。近代小説の作者は、みんなあやしく、うさんくさい人物なのかもしれない。懷疑派の言うことも含めて眉に唾をつけて読むことにしよう。

物言はぬ夫婦なりけり田草取 二葉亭四迷